

名古屋で市民公開講座開催

2017年6月4日(日) 名古屋国際会議場にて、
第68回日本東洋医学会学術総会 市民公開講座が開催された。
本講座は、日本東洋医学会と日漢協の共催により今年で17回目を迎えた。
325名が聴講し、会場内は熱気で満ちていた。

講演会に先立ち、学術総会会頭の金子幸夫先生が挨拶に立たれ、
講演概要と講師の先生方を紹介した。



司会 木許 泉 先生

また、日漢協の渡邊喜久彦常務理事は、
挨拶の中で漢方の現状と課題、
そして課題解決に向けた業界の取組を紹介した。

今年の公開講座のコーディネーターである、
広瀬クリニック院長の木許泉先生が
司会を務め公開講座は開演した。

今年のテーマは、
「漢方と鍼灸の知恵で幸せに生きる ～オキシトシンの恵み、未病と養生～」であり

- ・高村光幸先生(三重大学附属病院 漢方外来)
- ・高橋 徳先生(ウイスコンシン医科大学教授/統合医療クリニック徳 院長)
- ・丁 宗鐵先生(日本薬科大学 学長)

の3名が登壇し、会場内はメモをとる聴講者も多く、熱心さがうかがわれた。



第68回日本東洋医学会学術総会
会頭 金子 幸夫 先生



日本漢方生薬製剤協会
渡邊 喜久彦 常務理事

まず初めにプレトークとして、

「漢方と鍼灸をもっと身近に」と題して、三重大学附属病院 漢方外来の高村光幸先生が、漢方の歴史を中心に、基礎的な内容を動画を交えながら、わかりやすく解説した。



高村 光幸 先生

- ・漢方は、古代中国から紀元5世紀頃に導入された、主に湯液を服用させて治療を行う医学である
- ・漢方医学理論に則った薬剤以外は本来漢方薬とは言えない
- ・鍼灸も漢方も、何れも長い間日本人を支えてきた伝統医学であるが、歴史上、消滅の危機もあった
- ・漢方医学の復興を目指す医師の治療経験や研究に支えられてきた背景と、現代に漢方が存在する意義は大きい
- ・漢方薬の原料の多くは輸入生薬であるが、漢方薬の品質管理は優れている
- ・漢方薬にも副作用がある
- ・現状では漢方医学を専門とする医師は他の専門分野に比べて少ない など

続いては、ウィスコンシン医科大学教授／統合医療クリニック徳 院長の高橋徳先生の、「東洋の叡智が現代に蘇る～オキシトシン健康法～」と題する講演であった。



高橋 徳 先生

人を思い合ったり、人から大切にされたりして、積極的に人との関わりを持つことは、脳内の愛情ホルモンである「オキシトシン」の発現を増加させるという。この「オキシトシン」の発現が増加することで、日常のストレスに負けない心身を保つことができるという健康法の基本的な考え方を示した。鍼灸など、東洋医学の叡智を生かして、脳内の「オキシトシン」の分泌を促す健康法について、日頃の診療経験をふまえ、次の内容を時に笑いを誘いながら説明した。

- ・「オキシトシン」が操る様々な生理作用、人間模様
- ・特に社交性、愛情、信頼などに関する「オキシトシン」の生理作用
- ・東洋医学と西洋医学をミックスしていく考え方 など

続いて、「漢方の知恵 ～未病と養生～」と題して、日本薬科大学 学長の丁宗鐵先生が登壇した。



丁 宗鐵 先生

「今、日本は医療崩壊の真ただ中にある。
公平、安全、安心の医療を維持するために、
若い世代は、過剰負担を強いられている」と問題を示した。
「従来のパラダイムによれば、医療の偏在を解消するために、
医師の増員、医療費の増加等が問題となっているが、
今や、健康を医師に丸投げする時代ではなくなってきた」と続け、
「医療の最前線に立つのは、患者自身であり、
新しいパラダイムとして『未病』という考え方がある」ことを示唆し、
次の内容を解説した。

- ・未病とは病気に向かっている動的状態のこと
- ・東洋医学的未病とは、自覚症状があるが検査値には異常がない
- ・西洋医学的未病とは、自覚症状はないが検査値に異常がある
- ・医療上の未病とは、病気の治療過程であり、完治していない状態をいう
- ・治療上の未病とは、病気の再発防止を意味する など

最後に、公立瀬戸旭看護専門学校校長の山口英明先生から、
「今日の先生方のお話を、是非皆様の健康に役立ててほしい」との挨拶があり閉会した。
会場を後にする聴講者は、一様に満足げな様子であった。



山口 英明 先生



会場の様子